

温故知新メディア散歩

その名刺なんざんす? —『業界別 肩書きの辞典』—

昔、信州スキー場得意先の若い女性職員が「カチヨー」と大声で叫ぶのを聞いて、「課長」という響きの良さが印象強く残っている。「島課長」だからいいので、「島部長」では様にならない。私は残念ながら課長にはなれなかったが、何千枚の名刺を交換していつも思うのは肩書きの複雑さである。特に最近は分からぬ肩書き名刺多く、昭和人／旧人を困らせている。(菊地実)

たった二十枚の人生

今二十枚ほどの私自身の名刺が手元に残っている。「□□編集部」「●●プランナー」「**研究員」、さらにイベントや研究会事務局や政府系プロジェクト委員の肩書き名刺もある。私のような旧人類は『釣りバカ日誌』に見られる、社長・部長・課長といった名称に慣れ親しんできた。私個人は出版・広告・シンクタンクと特殊なギョーカイを歩んできた。

実は名刺肩書きについては、苦い思い出が二つある。一つは世界的飲料会社CC社にプレゼンした折、「ヴァイス・プレジデント」紳士に一生懸命熱弁を振るった。終わった帰り道でD広告代理店局次長氏がポツリと、「隣にいた若いディレクター氏が責任者だよ」と教えてくれた(はじめから言えよ)。中学生英語の頭でヴァイス・プレジデント=副社長と思い込んでいたが、実際は課長職でディレクター氏は「事業部長」だった。もう一つは、通産省系財団主任研究員を辞めて独立し、新潮社員御用達の活版印刷で個人名だけの特注名刺を作った。この肩書きのない名刺を旧知のM物産部長さんに出したら、上下裏表を透かされた。そこで断りなく大学講師を刷り込んだら、効果観面。私のようなチンピラには何がしかの肩書きが必要と心得た。それから三十有余年。今は監査役だが、年数回ヒアリングやイベントがあり、D社がつけてくれた「エグゼクティブ・アドバイザー」名刺を使っている。もうまもなく肩書きも名刺もいらなくなる。

＜図表1＞通産省系シンクタンクの肩書き

主席研究員(研究主幹 部長職)

主任研究員(課長職)

研究員 (課長補佐職)

補助研究員(平)

※補助金は、主任研究員年220日／260日制限だった

なんでこんな複雑になったの

前振りが長くなった。今回紹介する『業界別 肩書きの辞典』は企業社会を理解する格好の書。例えば『源氏物語』でも、頭中将＊1がどういう役職でどのような地位かわからないとストーリーはよく理解できない。

私が四十年近く過ごしたシンクタンクは、昔は実にシンプルだった＜図表1＞。その後90年代に入り副主任研究員といった職制が出たが現在のコンサルティング業界は複雑怪奇＜図表2＞。

例えばディレクター。映像業界では昔は泣く子も黙る監督さん。監督にも野球もあれば、工事現場監督もいる。まあ中間管理職。広告業ではもっともらしく、CD(クリエイティブ・ディレクター)が威張っている。但し、ファッション業界でCDというと、神々のお一人、かのクリスチャン・ディオールになる。

用語用法も業界が違うと、天地ほど異なる。たとえばAD。M大手雑誌出版社では社長より偉い人(アート・ディレクター)だったが、昔のテレビ業界では小間使いかパワハラの捌け口(アシstant・ディレクター)。また、どういうわけか大手広告代理店は局長・局次長・部長と役所風名称がつけられ、ごく少数の「課長」がいた。ここでも部下を持つ部長さんと部下を持たない部長さんに分かれていた。これは昔の大企業でよく見られた。さらにこうした役職とは別に、参事・副参事・主事といった社歴による身分もあった。

軍人だと上は元帥から下は二等兵まで分かっていたが、四谷ピアノバーで名刺交換した警察官は「警視正」とあった。○○署署長さんだそうで、よくテレビドラマに出てくる警部さんより二階級上で国家公務員扱いになる。

最近複雑化

官庁は次官・局長・局次長・課長・課長補佐・係長と

<図表2>コンサルティング会社の肩書き序列

経験年数	A社	B社	C社	D社	E社
10年～	バイス プレジデント	ディレクター	パートナー	ヴァイス プレジデント	シニア ディレクター
	プリンシパル	アソシエイト ディレクター			ディレクター
5～10年	マネージャー	シニア マネージャー	プリンシパル	マネージャー	マネージャー
		マネージャー			
2～5年	アソシエイト	コンサルタント	シニア アソシエイト	コンサルタント	シニア コンサルタント
					コンサルタント
1～2年	シニアビジネ スアナリスト	Analyst	コンサルタント	アソシエイト	アソシエイト
	ビジネス アナリスト				

<本書『業界別 肩書きの辞典』より>

スッキリしていたが、最近は審議官・参事官・企画官といったライン以外や長官・部長・室長と多様化している。身分もキャリア・技官・ノンキャリアと分かれている。「課長と言っても本省の課長は民間企業の課長よりも遙かに権限が大きい」(77頁)。私の経験でも特に局筆頭総務課長や法令審査委員は出世株らしく、財団でしきりに噂話が出た。私のクライアントだったゼネコン課長の話では、「本省課長と会う時は役員を連れて行く」と聞いてびっくりした。

本書で特に面白いのは、サービス業や伝統芸能である。高級クラブには「ママにもオーナーママと雇われママがあり…チーママは小さいママの略と言われ…店のムードメーカーになっている」(138頁／その通り!)伝統芸能落語の「前座」「二つ目」「真打」はよく知られているが、茶・華・舞踊などの「家元」「本家」「宗家」さらに「師匠」「師範」「名取」などは微妙な響きが感じられる。さらに各流派による上達度合いの許状名称は、伝統の素晴らしいと厄介さを示している。裏千家「初級・中級・上級が、さらに入門、小習、唐物と細分化されている」(152頁要約)これには礼金が絡んでいるらしい。

横文字乱立

最近目立つのは横文字肩書。生保の「FP」ファイナン

シャル・プランナーは定着したが、アクチャリー、ライフプランナーとかあまり聞かない肩書きもある。証券会社ファンド・マネージャー、アナリストはテレビ番組ですっかりお馴染みとなった。図書館司書も最近はデジタル・リサーチャー、アーキビストとか横文字が目立つ。

国家資格御三家=弁護士・公認会計士・税理士も、パートナーとか色々肩書きが付いている。さらに不動産鑑定士、旅行取扱主任、介護士、中小企業診断士といった肩書き名刺もよくもらう。

肩書きにはかつての「評論家」「コンサルタント」のように非常に幅広いものから「野菜ソムリエ」「パティシエ」のように、仕事・範囲が限定されている肩書きもある。さらに国家資格有無や業界認定資格の差異もある。例えば、漢字検定〇〇級!

本書はトリビアな情報がよくまとめられている。発行後十数年経ち、「暴露系ユーチューバー」とか「サギ師カケコ」、さらに新しい職業と横文字肩書きが続々と登場している。職種肩書きは時代を移す鏡である。

*1:天皇に関する私的な要件を担当する蔵人頭(くろうどのとう)と、宮中の護衛を行う近衛府(このえふ)の次官である近衛中将(このえちゅうじょう)を兼ねた役職。官位は四位相当の殿上人だが、「貴主」と呼ばれ、現在の官房長官みたいにお上側近で、権威があった。なお、蔵人頭の定員は2名(「両頭」)で、いずれも四位の文官と武官が分け合っていた。

・武官の蔵人頭/「頭中将(とうのちゅうじょう)」

・文官の蔵人頭/弁官(大弁または中弁)から選ばれ、「頭弁(とうのべん)」